

研修会のお知らせ
54ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成26年7月1日発行

2014.7
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

7号

第36巻
No.300



オタネニンジン *Panax ginseng* C. A. Meyer (ウコギ科 Araliaceae)

- 生薬** ニンジン（人參）根を秋に収穫し、調製加工する。加工法により大きく4種に大別される。
- 成分** サポニン：ginsenosideRa～h,Ro、malonyl ginsenosideRb1,Rb2,Rc,Rd、精油：panaxynol、peptidoglycan、choline、nucleotide等。
- 効能** 虚弱体質、筋肉疲労、病中病後、胃腸虚弱、食欲不振、血色不良、冷え性に用いられるほか、健胃強壯薬として配合剤に用いられる。また、十全大補湯、小柴胡湯、人參湯、麦門冬湯、六君子湯等多くの漢方処方にも配合される。



生薬 オタネニンジン

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

300号誌
記念誌

○○表紙について○○

和漢生薬の中で最も知られ、重要な薬であることは誰でも認めるところです。中国最古の本草書『神農本草経』の上品に収載され、「人參、一名人銜、一名鬼蓋。味甘微寒。五臓を補し、精神を安んじ、魂魄を定め驚悸を止め邪気を除き、目を明らかにし、心を開き、智を益すを主る。久しく服すれば身を軽くし、年を述べる」と記されています。李時珍（1518-1593）は「長年月の間に漸次に長成し、その根が人間の形体のようで神秘的なものだから人蔘（參）、神草というのであって、蔘の文字は浸、漸（徐々に効力を現す）の意義である」と、また「人參はその成長するに階級をなして伸びるところから人銜といひ、その草が陽に背き陰に向ふものだから鬼蓋といひ……」と名前の由来を述べています。薬効についても万能薬的な表現になっています。後に名づけられた属学名の *Panax* はギリシア語の *pan*（すべて）と *akos*（治癒）の合成語で「全ての病を治すもの」、つまり万病薬を意味していることはここから出たものとも考えられます。

古代から人參は野生採取が主で、『開宝本草』（973-974）に「人參は高麗、百済のものが多く用いられる。潞州（山西省長治県、秦代上党郡）の太行、紫团山から出るものをば紫团參といふ」とあり、野生採取された最上品の上党産や遼東産、朝鮮産を用いたようですが、現在では採り尽くされ、わずかに吉林省等で野生種が採取され、高値で取引されています。同時代の『図経本草』（1062）には「生え始めの小さなものは三四寸ばかりでただ一極五葉である。四五年後には二極五葉となるがまだ花茎はなく、十年後に至つて三極を生じ、永く歳月を経れば四極となり、各極いづれも五葉で中心に一本の茎が生える。これは俗に百尺杵と名けるものだ。三月、四月の頃に、粟のやうな細かな花を著ける。蕊は絲のやうで紫白色だ。秋季後に大豆ほどの子を七八個結び、生では青いが熟すれば紅くなつて自ら落ちる」とあり、生長の遅い野生種の特徴を良く捉え、まるで植物辞典の解説のように的確に形態や生育状況を説明しています。

日本には天平11年（739）渤海文王の使者により進上品として渡来したのが最初で、朝鮮からは隋、唐の時代に何度も入った記録があります。渡来品を貯蔵している正倉院には北122生薬が野生人參であることが確認されています。慶長12年には朝鮮より種子が献上されたことが記されていますが、実際に栽培が始まったのは元禄時代で八代将軍吉宗の時、人參の輸入に当たっていた村馬藩の宋家に命じ種子、苗を入手し、日光で栽培化を試み成功しています。日光周辺で半官営による栽培が開始され、幕府から種が貸与されたことから人參の頭に御種を付してオタネニンジンという呼名が現在でも植物名として残っています。寛永の頃には栽培地が46ヶ村に及んだといわれ、多く生産されたときは清国に輸出されたこともあります。ちなみに朝鮮での栽培化は江戸末期になってから、中国では明治の始めになってからといわれています。現在ではこの栽培技術が会津、信州、出雲に引き継がれています。（村上守一 記）